

住民本位の地域づくりを考えよう！ 地域づくり学習会・シンポジウム

佐々木 俊 司（山形県／生活協同組合共立社・組織企画室）

「住民本位の地域づくりを考えよう！—地域づくり学習会・シンポジウム」を2月11日、鶴岡市で開きました。主催は庄内地域づくりと子育て文化協同の会（以下「協同の会」と日本労働者協同組合連合会センター事業団庄内事業所の二つの団体です。

この集会は「協同の会」が昨年の秋から準備をすすめてきたもので、会内部としては4回目の拡大「協同塾」（後段で説明）として位置づけてきたものです。子育て文化協同の事業が地域づくりと深く結び付くこと。そして新しい地域づくりの強力な部隊として労働者協同組合がこの地域でも産声を上げたこと、これが今回センター事業団との共催となった大きな理由でした。

「協同の会」は約3年前の90年12月、この地で開かれた「第6回子育て・文化協同全国交流研究集会」に結集した地元の140名からなる実行委員会がその母体となっています。この全国集会は以前剣持清一先生（故人・元山形県国民教育研究所所長）が生協教育活動センター主催の子育てシンポジウムで提起された4つの協同（「教育・文化の協同」「生産・消費の協同」「医療・福祉の協同」「非核・平和の協同」）を、さらに「自然環境を守る協同」「職場・営業を守る協同」「民俗行事・伝統行事を守る協同」という3つの運動を加え、地元には限りない大きな財産を残した集会でした。

地元の実行委員会はその後、解散をせずに幾つかの学習会・シンポジウムを重ね、この地に20年間積み上げてきた地域教育活動を90年代、21世紀へどう発展させていくのかを真剣に模索してきました。その結果二つのことを結論として持つことになりました。一つは子育て文化協同の運動は「地域づくり」がまず視点としてなければ私たちが目指す本物の運動ができないこと。そしてこの分野

での協同組合をこの地に設立していくこと、でした。「庄内地域づくりと子育て文化協同の会」はこうして昨年6月に正式に発足したのです。「協同塾」は4年後に目標設定した、教育文化協同組合設立へ向けた発起人たちの学習の場として用意してきたものです。第1回「協同の意味をたずねて」（森芳三山形大学名誉教授）、第2回「地域づくりと協同労働—Part I」（農協労組前分会長、医療生協労組委員長、生協共立社労組委員長）、第3回「地域づくりと協同労働—Part II」（大高全洋山形大学教授）と会を重ねて、今回の学習・シンポジウムとなったのでした。

さて、3年前に子育て全国集会を開催し、いまこの分野で協同組合づくりを目指そうとしているこの地鶴岡市は山形県の中でも県都山形市に比べ人口も10万人と少なく、経済格差もある地方の小都市です。何のへんてつもないこの小都市ですが、3万人近い組合員を擁する医療生協、そして年間1万人前後の子どもたちが参加する地域教育の活動センターをもった鶴岡生協がやはり同じ規模の組合員を擁して存在するという協同のとりくみが全国の中でもすすんでいる所でもまたあるのです。

80年と86年の2回この地のさまざまな運動を積み重ねてきた諸団体の活動家たちが集まったの地域づくり集会がこれまでも開催されています。今回の集会はある意味ではその90年代版でもあったといえるでしょう。

当日の集会は四部構成で朝から夜遅くまで極めてハードに行われました。

I部は「各分野からの報告」。①農民の立場から②自然保護運動から③労働者協同組合から④地域の労働者から（通信産業労組）⑤自治体労働者から⑥中小商工業者から⑦文化運動から（親子劇場、の7本。生産地庄内での農業が追い詰められ

ている実態、市民のくらしを圧迫していきながら、同時に中に働く労働者の切り捨てが強行されている労働現場、明日の営業の見通しすら立たず自殺者までうんできている中小商工業者の実態、衰退していく地方都市の中での議会と行政の考え方の問題。そして自然、文化運動の報告では「それぞれの違いを越えて緩やかに連携していく」という課題への統一戦線の考え方や「学習の場は学習して実行する、実行があるからこそ学習する」という実践への視点が明確に出され、参加者の感銘を与えました。

Ⅱ部は黒川俊雄先生による「住民本位の地域づくりのカギ・協同について」をテーマにした記念講演。黒川先生については昨春の協同総研集会のおり、労働者協同組合の新しい息吹に触れる中、ぜひともこの鶴岡にお招きしたいという当日参加した者の熱い思いから実現したものでした。

講演は期待通り、協同の新しい展開が参加者に驚きと熱い思いを（もちろん疑問も含めて）呼び起こしてくれました。話の内容もくだった中味で参加者には聞きやすかったようです。黒川講演を受けてⅢ部シンポジウムが開かれました。

時刻は午後3時。そろそろ疲れも出てきたころではありましたが、講演時に120名もいた参加者が70人ほどに縮みました。「国民が文字通り主人公になる時代を」と話され感銘をうけた後にしては、何とも奇妙な変化となりました。それまでは聞く一方でしたからやっと一人一人が発言できる場に移り、本来ならイキイキとしてくる所ですが、結果はそうになりました。ほぼ喋るなどいっても喋りたがる人達が残ったという感じでしたから、私たちの、これが「地域づくり」「一人一人が主人公」という実践の到達点、ときっちり見極めなければいけないのでしょう。

シンポジウムは6つの（10人～15人）テーブルに別れての論議、出た質問に対しての答弁という形で進行しました。

初めに「協同の会」の青山崇代表、自主管理労組も抱え、労働者協同組合をも模索している自交総連の丸斉書記長、医療生協の岩本専務、生協共

立社の山中洋専務の4人から感想を受けました。

この中で特に生協の山中専務は「地域に協同連合を」との提起をされ、論議は「労働者協同組合の中の労働者の権利、労組はどうなるのか」といった労働者協同組合に関するものと、この「地域の協同連合」の必要性について熱が帯びました。

県外からわざわざこの日のために駆けつけてくれた方もいらっしゃいました。その一人、全国少年少女センターの岩橋能二さんは「どうなる どうなる だけではどうにもならない—という呼びかけのあのピンクのチラシをみて行こうと思ってきた。来たかいあった。この思いを全国の人に伝えたい」と話されていました。またもう一人、長野センター事業団の小沢房雄専務は「鶴岡は協同人の多いところ。教わってこようと思ってきた。長野でも協同集会を87年から連続してやっている。資本を我々が使う、そういう時代がやがてくる」と熱っぽく話されていました。

Ⅳ部は番外。黒川先生を囲んで一杯入りながらの議事録なしの話し合い(?)ですので詳しくは触れられません。人によってはこの「番外」が一番ためになったと豪語する人もいました。正体不明になる御仁も出るなど大いに盛り上がったことだけは間違いありません。夢を語り合うことがいかに人を勇気づけ、元気づけるかを改めて知らされたⅣ部でもありました。

集会の記録は「協同の会」の機関紙「おがる」の特別号に特集する予定です。詳細はこれをぜひご参照下さい。

のべ参加者数は260名。市内25団体の協力・賛同のもとで開催されましたが、蓋を開けてみると地域の「協同連合」の必要性、地域の問題、課題を明らかにしていく研究機関の必要性がこもごも出され、そのための組織をまたこうした協同集会の定期開催が、こちらの予想を越え強い期待として現れた集会でした。

「協同の会」としてもこうした地域の「主人公」たちの期待に応えられるよう、きっちりとした総括と実践を決意しているところです。